

アメリカン・ボード宣教師文書

——同志社女学校女性宣教師を中心として——

〈M. F. デントン書簡一訳および註一〉（7）

阪上敦子 監訳
 吉岡弘子
 秋山恭子
 竹田清子
 小島紀子
 矢吹世紀代
 小林弘美

〈バートン書簡 B-6〉【吉岡弘子 訳】

1900年7月9日

メアリー F. デントン
 カリフォルニア州 サンフランシスコ
 Y.M.C.A. ビルディング

拝啓 デントン様

蒸気船ドーリック号の船上で書かれた3月30日付で始まるお手紙¹、サンフランシスコで後日投函されたものですが、有り難く拝受いたしました。幻灯機スライドを捜していたためと、さらにボストンをしばらく離れていたため返事が遅くなりました。同封の一覧表にしたがって11枚のスライドを速達でフリーア氏²気付でお送りいたします。ご覧になるとお分かりのように、

8番のデイヴィス博士のスライドが見つかりません。なぜ8番がないのか理由は分かりません。

デントンさんには同志社女学校のために働いてくれる人を探す権限が全面的に与えられています。どのウーマンズ・ボードも、同志社女学校の運営再開を〔学園〕同志社と協力して行う気持ちに完全になってきていると私は思います。同志社の教育現場を見まわしても、あなたほど現場で先頭に立って働ける人はいません。ですから日本にご帰国の折には、進んでいく道筋が十分に開かれていることを望まずにはられません。

同志社女学校のために新しい外国人教師二人を探すことと、来年度への助成金500ドルの交付が必要とのミッションからの要望は、全てのウーマンズ・ボードに伝えておきました。どこからもまだ返事はありませんが、二人の教師が見つかり日本に派遣されることが決まれば、500ドルが要請されるだろうと考えているのではないのでしょうか。まだふさわしい女性は見つかっていませんが、特定の場所に適した宣教師を見つけることがいかに困難であるか、想像もおつきにならないでしょう。ご自分で探してみられると、きっとその難しさは段々と分かってくると思います。注意深く観察されて適任だと思う人が現れたときには、その人に任命に向けてすぐに出願するように言ってください。私は日本ミッションとやり取りをしていますので、事前に私に手紙を送ってくださるのがいいかと思います。いろいろなミッションから多くの要請が来ており、適任の方が応じてくださるようならゆる方向に手を尽くしております。その方が志願してくださり、仕事にふさわしいと思えたら喜んで任命させていただきます。

改めて幻灯機の問題に戻りますと、この国ではおっしゃるような方法で入手できた例は聞いたことがありません。デントンさんが行かれるであろう多くの場所では、幻灯機は教会の誰か、またはその土地の誰かが持っているかもしれません。もし伝道目的で提供してくださるような方がおられるなら、幻灯機を持って帰られますか。日本で有益に使うことができるでしょうか。

アメリカでの生活の中で、幾分か休みを取られるといいのですが、1、2か月の完全休暇を取ることはできませんか！実際に休み自体がもう重荷だと感じるまで、ちょっと試しに休みを取ってみてはいかがでしょう。自分には休暇は必要ないと思いつつ一時帰国して、こちらにいる間は働きづめでそのあと現場に戻り、その時初めて残念ながらやっぱり休みを取っておくべきだったと思知らされる、というような宣教師を多く見てきました。この経験から、デントンさんには一定の期間、精神的にも肉体的にも完全にリラックスできる休暇を、静かな場所で是非とも取っていただきたいのです。

昨日、原田氏³が事務室に来ました。今日、ロンドンに向けて出航します。今週初めのニューヨークでのあの恐ろしい事故⁴のため、出航が遅れたのです。

敬具

ジェームズ L. バートン

同封物あり⁵

1. ドーリック号の便箋でデントンが手紙を書いたので、バートンはデントンがサンフランシスコまでドーリック号に乗船したと思っているが、実際には彼女はドーリック号にハワイまで乗船し、ハワイからは日本丸に乗船した。この経緯については[274]及び註7を参照のこと。
2. Frear, Walter (1828-1922) ニューヨーク生まれ。1851年イェール大学卒業後、宣教師としてハワイに渡る。その後、1855年カリフォルニアに移り、50年以上ハワイとカリフォルニアで伝道活動に従事。この間、12年以上アメリカン・ボードの太平洋沿岸担当 (Agent on the Pacific Coast) を務める。
3. 原田助 (1863-1940) 熊本藩士、鎌田収の次男。1880年同志社英学校入学、後に神学科に転じる。1888年渡米、シカゴ神学校、イェール大学に留学。1907年から1919年まで同志社第7代総長、その後ハワイ大学教授となり、1932年退職。
4. 1900 Hoboken Docks Fire のことか。1900年6月30日、ニューヨーク港、ホーボーケンの栈橋で大火災が発生、326人以上が死亡する大惨事となる。
5. スライドの一覧表が同封されていたようだが、マイクロフィルムにはない。

〈ロス書簡〉【秋山恭子 訳】

マサチューセッツ州
ケンブリッジ
ランカスター通り17番地
[1900年] 7月12日

メアリー・フローレンス・デントン
サンフランシスコ

拝啓

日本人女性¹ひとりをニューイングランド音楽院²に通学させる支援を求め
るお手紙を受け取りました。私の気持ちとしましては、出来るだけ前向きに
対処したいと思います。来学期は9月に始まります。もちろんその女性につ
いてはもっと知る必要があります。デントン先生ご自身からだけでなく、ア
メリカン・ボード代表のおひとりとして存じ上げているウォルター・フリーア
牧師³からもお伺いしたいと思っております。R

敬具

ジェームズ H. ロス⁴

1. 松田幸 前出〈半田多喜書簡〉
2. New England Conservatory of Music 1867年創立。マサチューセッツ州ボス
トンの私立音楽大学。アメリカ国内最古の音楽院で最難関の教育施設。
3. フリーア牧師 前出〈B-6〉
4. Ross, James H. 会衆派の雑誌 *The Congregationalist* の1900年4月26日号に
音楽と伝道について投稿した。デントンはこの記事を見てロスに手紙を出した。詳
細はこのあとの [275] と [B-7] を参照のこと。

〈デントン書簡275〉【竹田清子 訳】

[バートン書簡 [B-6] への返信]

サンフランシスコ

ウォルター・フリーア牧師気付

[1900年] 7月21日

拝啓 バートン博士

7月9日付のご親切なお手紙を有難うございます。スライドはまだ見ておりませんが、フリーア博士が預かって下さっていると思います。日本での伝道活動に使う上質の幻灯機は、とても重宝されるでしょう。私のためだけでなく、他の宣教師の方にもお貸しできるでしょう。ひとつあればとても有難いですし、おっしゃるように「どなたか提供して下さる方」を見つけることができないとしても、思いやりのあるご配慮や、休暇をとるようにご提案くださる優しいお心遣いには心からお礼を申し上げます。太平洋ウーマンズ・ボードのご婦人方が私を放免して下されば、すぐにボストンに行って休むつもりです。

ウーマンズ・ボードの伝道委員会が、同志社女学校について何を決められるのか大変気になります。もし同志社での仕事に携わる人がひとりも見つからないのなら、12月には日本へ帰るようお願いするつもりです。しかし現地での必要に対応できる何らかの案が立てられることを願います。お金が是非とも必要です。同志社女学校へ年間500ドルというミッションの議決額は、二人の先生が見つかるか否かにかかっていた訳ではないと思います。1900年度の残りの期間分250ドルが無理なら、少なくとも167ドルの援助金と、1901年度の500ドルを認めてもらえないか、太平洋ウーマンズ・ボードにお尋ねいただけないでしょうか。これができれば、きっと京都ステーションは一息つけるでしょうし、女学校にとって新しい息吹となるでしょう。女学校は同志社全体の財源の大きな負担となっていますので、この援助金は大変な恩恵となるでしょう。東部ウーマンズ・ボードのご婦人たちは女学校を最初に支援して下さった方々¹でしたので、そのご婦人方がもう一度支援をしたいと願って下さるのなら、もちろん、その特権は認められるべきですが、今すぐに何

かをする計画がないのでしたら、太平洋ウーマンズ・ボードにぜひお譲りください。

オレゴン州とワシントン州で受けましたご親切やご厚意については、すべて手紙でお知らせした通りです。至るところでとても親切にいただきましたので、一箇所を特定すべきではありませんが、ポートランド第一教会のフランク M. ワレン夫人（ポートランド市ウエストパーク通り213番地）や伝道婦人会の方々、またオレゴン州ヒルズボロのオレゴン支部長のソーン夫人、そしてタコマのワシントン支部長のフライデー夫人へのバートン博士からのお礼の手紙はきっと努力を促すことになり、皆さんの熱意にもさらに力が入るものです。これらすべての教会でお目にかかった方々のことは、いくら褒めても褒めすぎにはなりません。

私たちの学校のために若い女性を見つける難しさについては、私も実感しています。ワラワラ大学²のペンローズ学長³の妹さんが承諾してくださればと願っています。彼女は私たちの仕事には最適の人だと思いますし、バートン博士の許可も頂いていますので、彼女の説得に努力するつもりです。

ホノルルのリチャーズご夫妻⁴について京都から手紙を受け取られましたか。ご夫妻は今アメリカにおられます（8月15日迄はニュージャージー州モンクレア、クレアモント通り231番地に滞在）。リチャーズ夫妻がホノルルにとどまる理由はいくつもおありですが、お二人は同志社にとって素晴らしい方でしょう。この地で「掛け替えのない」男女が是非ともほしいのです。そういう人こそが日本で働くことができるのです。リチャーズ氏は海外での伝道活動にずっと参加したいと思ってこられました。そして本当に熱心をお願いされたら、きっとお引き受けくださると思います。私自身に関しては、ミッションが私を派遣される所へはどこへでも参ります。まず東京での仕事は極めて重要です。そして同志社女学校には大学を出た教師がぜひとも欲しいのです。また、バートレットご夫妻⁵が鳥取へ戻ると主張されるようでしたら、私もそこへ派遣して下さるようお願いいたします。ご覧のように

私にはまったく予定がないのです。

少し前、雑誌『コングレゲーションナリスト』⁶に「音楽と伝道」という記事が掲載されていました。私は筆者に手紙を書いて、ニューイングランド音楽院⁷にいる我が校の女子生徒のひとり⁸を援助して下さるように頼みました。お返事の写しを同封いたします。すでにこの件に関しては、音楽院のヘール博士⁹と手紙のやり取りをしています。ヘール博士はそのような学生は温かく迎えて配慮すると保障して下さっています。私の頭の中にある教え子はアメリカにおりまして、ロス氏が直ちに彼女を援助して下さいと思います。中瀬古氏¹⁰が私の弟子であった事をぜひ思い出して、私が今回も賢明な選択をしたと信頼してください。ロス氏がこの女性に寛大なる援助をして下さればいいのですが。そのような学生には、一学年に500ドル必要だろうとヘール博士は書いておられます。きっと長い休暇や書物、そして衣服代に少なくとももう100ドルは必要でしょう。かなり高額に思えますが、この女性は日本できっと多くの機会に恵まれることでしょう。バートン博士のお手紙は多くの人に読まれますので、将来私が彼女に期待することについてお話しするのはお会いするまで待つことにいたします。もし彼女が立派な音楽教育を受けることでお墨付きを得て日本に戻ってくればですが。ケンブリッジのジェームズ・H・ロスとはどのような方なのでしょう。

敬具

メアリー F. デントン

1. 同志社女学校の最初の校舎建設のために東部ウーマンズ・ボードから6000ドルの支援があった。
2. Whitman College のこと。ワシントン州ワラワラにあるリベラル・アーツの私立大学。1859年創立。会衆派の協力で運営していたが1907年会衆派と決別。
3. Penrose, Stephen B. L. (1864-1947) フィラデルフィア生まれ。会衆派の牧師。1894年から1934年まで40年間 Whitman College の学長を務める。
4. Richards, Theodore (1867-1948) ニュージャージー州モントクレア生まれ。

ウエズリアン大学卒業。1889年、ハワイの Kamehameha School for Boys の教師となり1893年から98年は校長に就任。1898年、中国へ行くつもりで辞職するが、結局ハワイに残り伝道活動で多大な貢献をする。妻の Mary Atherton Richards (1869-1951) もハワイの青少年や女性の組織に貢献。

5. バートレット夫妻 前出〈151〉
6. *The Congregationalist* 1849年創刊、年4回発行のキリスト教会衆派の雑誌。
7. ニューイングランド音楽院 前出〈ロス書簡〉
8. 松田幸のこと 前出〈半田多喜書簡〉
9. Hale, Edward Danforth (1859-1945) 音楽教育家、ニューイングランド音楽院で教授を務める。1900年ごろ雑誌 *The New England Conservatory Magazine* に “Musical Pedagogy” (「音楽教育」) というコラムを定期的に執筆。
10. 中瀬古六郎 前出〈151〉

〈バートン書簡 B-7〉【小島紀子 訳】

〔デントン書簡 [275] への返信〕

1900年8月2日

メアリー・フローレンス・デントン
カリフォルニア州 サンフランシスコ
ウォルター・フリーア牧師気付

拝啓 デントン様

7月21日付のお手紙を有り難く受け取り、同封のもの¹と共に興味深く読ませていただきました。バートレット夫妻²と彼らの仕事のやり方には非常に尊敬の念を抱いています。ご夫妻が鳥取に戻らないとは思いたくありません。仕事の仲間がいてくれたらと心から願っております。そのうち仲間がひとりは見つかるだろうと思います。お二人はすばらしい人たちで、どこにいても立派な活動をされることでしょう。

チャイルズさん³とは同志社〔女学校〕への充当金について話をしていますし、彼女が自分たちの委員会できりあげて、本年度分200ドルの充当金を申請すると決まりました。ここ〔ボストン〕のウーマンズ・ボードが同志社

の女子部への関心を捨てたくないことはわかっていますが、断念するとしたら残念です。充当金については、デントンさんが所属する太平洋ウーマンズ・ボードに任せただけが妥当なのかもしれません。来る1901年には500ドルを期待できると思います。教えてくださった住所に宛てて、北部への旅であなたにとっても親切にしてくださいました友人数名に手紙を書くつもりです。その方たちはデントンさんに親切や誠意、そして思いやりを示す理由がきつとたくさんあったことでしょうし、デントンさんは伝道活動への新たな着想を彼女たちに与えられたことも確かでしょう。

ケンブリッジのロス氏とはどのような方かとお訊ねですが、ロス氏は広報係としてここアメリカン・ボード本部と4、5年関係があります。彼はしばらく牧師をしていましたが、健康を害してジャーナリズムの道に入りました。私たちが宗教に関係のない出版界で広く知られているのは彼のおかげなのです。東部に来られて、一般紙にどれだけ多くのアメリカン・ボードの記事が載っているかを知れば、もっとよくお分かりになるでしょう。私には残念ながら、彼が独力ではその若い女性の音楽教育に十分なお金を出せないのではないかと思います。自分もいくらか出して、他の人々からも寄付を集めてなら手助けできるかもしれません。約束したこと全てを守ってくれるようお願いされることをお勧めします。彼はきつとご期待に沿えることでしょう。

中国から素晴らしいニュースが届いています！⁴そのことに触れずに手紙を書くことはできません。この6週間、ミッションの協力者全員と同様にここ[ボストン]でも大きな重荷を負ってきました。

できるだけ早くこちら[ボストン]にお越しください。9月末までそこ[サンフランシスコ]に留まり、それから途中でセントルイスでのボードの年次総会に参加するというのでは遅すぎませんか。総会に出席されるのを楽しみにしています。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. 1900年7月12日付デントン宛でのロス書簡。
2. パートレット夫妻 前出〈151〉
3. Child, Abbie B (1840-1902) 原文では Childs と Child の両方が混在する。マサチューセッツ州ローウェル生まれ。1870年から1902年に亡くなるまで東部ウーマンズ・ボード国内部門幹事 (Home Secretary) を務める。機関誌『女性のための生命と光』(*life and Light for Women*) の編集者でもあった。
4. 1900年2月から7月号にかけてのアメリカン・ボードの機関誌 *Missionary Herald* によると、中国では当時義和団事件 (排外的農民闘争) のためアメリカン・ボードの4つのミッション (北中国ミッション、山西ミッション、福州ミッション、南中国ミッション) にも被害や危険が及んだが、伝道活動は進み、前途は明るいという報告がなされている。

〈デントン書簡234〉【阪上敦子 訳】

サンフランシスコ

Y.M.C.A. ビルディング

ウォルター・フリーア牧師気付

[1900年] 8月9日

拝啓 チャイルズ様¹

同志社女学校への今年度の〔支出金〕200ドルを〔東部〕ウーマンズ・ボードに要請して下さるとのこと、そしてウーマンズ・ボードが女学校への関与をやめるお気持ちがないと伺って心から嬉しく存じます。太平洋ウーマンズ・ボードに学校の運営を任せてはどうかとバートン博士にお尋ねした理由は、昨年1899年7月、私たちのミッションの集まりで任命された委員会が、ウーマンズ・ボード宛に書面で援助をお願いしましたが、1900年3月に私が日本を離れた時点では、委員会からの何通もの強い訴えに対して全くお返事をいただいていたからです。このため、ウーマンズ・ボードには学校を引き受ける意思がおりではないのだろう、と私たちは結論づけておりました。

一方、こちらの沿岸では強い関心を持ってくださっていることを知っていますので、太平洋ウーマンズ・ボードのリストに支出金を載せてくださるよう
に、バートン博士にお願いしたのです。皆様が「同志社女学校を見捨てる気
がない」と思ったださっているのは嬉しいかぎりです。どうぞ見捨てない
てください！この学校は、長年にわたり多額の寛大な寄付をしてくださった
ウーマンズ・ボード管轄のお仕事です。そして今、この学校はこれまで以上
によりよい仕事を継続していくことを確信しております。

今年度分の200ドルは絶対に必要です。そして援助金の支給を早くお知ら
せくださればくださるほど嬉しさは募りますし、9月によりよく仕事を始め
ることができるでしょう！もし賛成の決議が得られれば、正式の手続きを待
たずとも、ラーネッド博士に予定通り計画実行可能と、すぐにお手紙を書い
ていただけませんか。お金〔経済的裏付け〕がなくて新学期を迎える
ことがどれほど厳しいかお分かりでしょう！そして200ドルでなく、もし
も250ドルをお願いできたとしても、その額はその年度を通しての必要な額
にはなりません。1899年6月に500ドルを要請しておりましたのはご存じでしょ
う。250ドルはその半額です。そのお金はどこから出るのでしょうか。チャ
イルズ様や寄付をしてくださる方々にどれほど私たちがこの援助を必要とし
ているか、どれほど同志社女学校の存在を私が信じているか、この学校が日
本の女性のためにこれまでどれほど貢献してきたか、そしてこれから貢献す
るであろうかを、どのように書けば分かっていたらいいのでしょうか。

そして日本と一緒に連れて帰ることができる若い女性二人をどこで見つけ
られるか、よいお考えはありませんか。ぜひ一人は声楽や器楽を、そしても
う一人（是非とも大学を出た女性）は英語を教え、日本語を学び同志社の仕
事を一生の仕事とする準備のできる女性です。他の物も必要です！是非とも
ピアノを1台、オルガン1台、そしてもし誰かよい幻灯機を提供してくださ
る方をバートン博士が見つけてくださったら、どんなにか助かるでしょう！
ただ、通常の仕事への寄付が少なくなるとお考えなら、予備費や臨時費のお

願いは差し控えますので。

近々お便りをお待ちしております。そして私たちの大切な学校を援助したいと思って下さっていることに感謝の気持ちをいっぱい込めて。

メアリー・フローレンス・デントン

1. チャイルズ 前出 (B-7)

〈デントン書簡278〉【矢吹世紀代 訳】

サンディエゴ

[1900年] 9月28日

拝啓 バートン博士

チャイルズさん¹からのお手紙が何度か転送されて²、遅れて私の手元に届きました。頂いたお手紙³はラーネッド博士⁴に送りました。女学校が存続の困難に直面している今、京都ステーションの誰もが援助を待ち望んでいることを私にはよくわかっております。ところが今度はチャイルズさんは何も出来ないと言ってられました！ジュエット夫人⁵は、援助がなければ京都ステーションや学校運営に携わる日本人に責任がのしかかるとおっしゃっています。1900年度の〔運営費として〕500ドルの捻出が厳しいのであれば、その半額の250ドルだけでもすぐに出していただけないでしょうか。そのお金が是非とも必要なのです。同封のものを読んでいただけないでしょうか。そうすれば、エスコンディード⁶からの手紙も、チャイルズさんへ出した手紙も、ご理解いただけると思います。

私は今、南カリフォルニアに来ており、どの教会からも温かいもてなしを受けています。ここでは10月下旬まで私に仕事の機会を設けてくださるようです。そのあと南ルート⁷で直接ボストンへまいります。ワシントン D. C. やフィラデルフィアには会いたい友人もおりますので。フィラデルフィアでは(オールズ氏⁸の頼みで)、日本人女性についての講演会を2回行うことになっ

ています。幻灯機のあるところでは、どこでも私のスライドの映写は大きな関心を持って受け止められています。今、皆日本に興味津々なのです。

お返事を心待ちにしております。そして同志社女学校には緊急の必要性に対応して何らかの道が開かれるだろうと信じています。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン
カリフォルニア州 ロサンゼルス
ダウニー通り813番地気付

1. チャイルズ 前出 (B-7)
2. デントンは一時帰国の間、太平洋沿岸の多くの教会を訪ねたため居場所を転々としていた。
3. 1900年8月2日付の手紙 [B-7]。バートンがチャイルズに直接話をして「同志社に本年度の運営費として200ドルを支払うよう彼女が委員会で働きかけてくれるだろう」と書いている。
4. ラーネッド博士 前出 (B-3)
5. ジュエット夫人 前出 (B-5)
6. Escondido カリフォルニア州 San Diego のすぐ北にある市。
7. 当時アメリカ大陸を横断する主なルートは Northern Pacific Railway が運営する北ルート (オレゴン州～アイダホ州～モンタナ州～ミネソタ州) と Southern Pacific Railway が運営する南ルート (カリフォルニア州～アリゾナ州～ニューメキシコ州) があった。サンディエゴからロサンゼルスに移動したデントンは南ルートを利用してシカゴ経由でポストンへ向かうつもりであっただろう (Los Angeles～Tucson～El Paso～Tucumcari～Kansas City～St. Louis～Chicago)。シカゴ～ニューヨーク間は1852年にすでに開通していた。
8. Olds, Charles Burnell (1872-1971) 1899年ハートフォード神学校卒業。1902年 J. D. デイヴィスの二女 Genevieve Woodbury と結婚。1903年アメリカン・ボード宣教師として来日。1903年から1913年まで宮崎に滞在、その後、新潟や岡山でも伝道活動をする。1939年帰国。

〈バートン書簡 B-8〉【阪上敦子 訳】

1900年10月2日

メアリー F. デントン
カリフォルニア州 ロサンゼルス
ダウニー通り813番地

拝啓 デントン様

チャイルドさん¹とスエット氏²への手紙が同封してある9月28日付のお便り³に早速返信しようと急いで書いています。そして太平洋ウーマンズ・ボードから要請のあった同志社女学校への500ドルは、すでに取り決めを完了しましたので、この秋に送ってこられる見積書通りに支給されるでしょう。ここ [ボストン] のウーマンズ・ボードが即座に充当金を支出して同志社女学校を援助できるように願っております。私としてもできる限りのことをするつもりです。ひょっとするとデントンさんの講演中に、女学校の困窮に対して特別献金をするのを名誉なことだと思う人が見つかるかもしれません。このウーマンズ・ボードが充当金を拠出してくれるにしても、敬虔で裕福な方々に会われる折には、このことを心に留めておかれるようにお勧めします。チャイルドさんとお話した通りのことを、この前の7月に書いておかなかったことを申し訳なく思っています⁴。中国での出来事⁵やここで山積みになっている他の多くの事案のため、かなり多くの返事を出せずじまいになってしまいました。

チャイルドさんよりのお手紙をお返しいたします。ご親切にも送ってくださり、喜んで読ませていただきました。東部へ来られましたら心から歓迎いたしますし、太平洋沿岸のとても多くの教会員との出会いをデントンさんが喜んでおられるのを見て、皆うれしく思うでしょう。あなたも教会員の方々にとても喜ばれることをされているのです。

敬具

ジェームズ L. バートン

同封書簡

1. チャイルド 前出〈B-7〉この書簡では Childs でなく Child と表記。
2. Swett, Charles E. アメリカン・ボードのボストン本部事務局の出版購買担当係 (Publishing and Purchasing Agent)。
3. デントン書簡 [278] のこと。
4. 7月の時点でのチャイルドとのやりとりは不明であるが、8月2日付のバートン書簡 [B-7] では、チャイルドと女学校への充当金の件について話したこと、今年度分として200ドルを運営委員会に要請するつもりであること、そして次の1901年度分として500ドルが期待できるかもしれないとチャイルドが言ったことを、デントンに書き送っている。
5. 義和団事件のことか。

〈デントン書簡279〉【吉岡弘子 訳】

カリフォルニア州
ロサンゼルス
ダウニー通り813番地
1900年12月14日

拝啓 バートン博士

そちらからのお手紙を何か月もお待ちしております。9月もしくは10月に私からの手紙を受け取っていただいたでしょうか。同志社女学校で働いてもらうようにご検討いただきたい二人の女性について書いたものですが。もし誰も鳥取へ行く人がいないのなら、ヒースさん（私が提案した二人の女性の内のひとりですが）なら、前向きに考えてくれるでしょう。バートレット夫妻¹だけを鳥取に置いておくのは賢明なことではないと非常に深刻に感じております。ヒースさんとベリーさんには是非ともお返事がしたいですので、近いうちにご連絡いただければと存じます。

9月に南カリフォルニアに来ました。以来ずっとこちらの地元の教会で[講演の] 仕事をしています。最後の講演依頼は1月9日で、その後はできるだ

け早く東部へ出発して休養を取りたいと思います。そして4月には日本へ旅立ちたいと考えています。「私の収入の範囲内」で住める適当なところがボストンではありますでしょうか。YWCA ではどんな条件が得られるでしょうか。そうせずに済むなら、オーバーンデール²には行きたくありません。何か良いご忠告があればお願い致します。

ベリーさんやヒースさんが無理のようでしたら、他にどなたか同志社女学校に適した女性の心当たりがおありでしょうか。手伝って下さる方なしでは帰りたいありませんので。お二人は私が見つけれられる中で最高の人物のように思います。宣教師として日本へ本気で出かける気持ちのある人たちを探すのは本当に難しいことです。

早いご連絡をお待ちしております。

敬具

メアリー・フローレンス・デントン

1. パートレット夫妻 前出 (151)
2. Auburndale ボストン郊外の Newton にある村のひとつ。詳細については次の [B-9] 及び註5を参照のこと。

〈バートン書簡 B-9〉【小林弘美 訳】

〔デントン書簡 [279] への返信〕

メアリー・デントン

カリフォルニア州 ロサンゼルス

ダウニー通り813番地

1900年12月21日

拝啓 デントン様

12月14日付のお手紙が昨日届きました。読み終えて直ぐに行方不明の手紙

を調べ始め、10月11日付のあなたからの2通は、私がメキシコへ行って留守の間に届いていたことが分かりました。手紙の内容はほとんどすべて国内部門に関する話題でしたので、私の秘書から国内部門の幹事に廻されて、彼がすぐにお二人の若い女性¹とデントンさんへも手紙を書くことと了解されていました。ところがどうしたわけか、返信されず、昨日私が捜したところ、処理済みのファイルの中に見つけました。[幹事の]ダニエルズ博士²は、お二人両方に手紙を書くことと先程おしゃっていました。

手紙が遅れたことには心からお詫びを申し上げますと共に、遅れたことで深刻な問題が生じないように願っています。10月11日付の手紙を読んで浮かんだ唯一の疑問は、このお二人の年齢が日本語を習得するには高すぎるのでは、ということです。伝道活動の重要性から、他の国や日本でも宣教師は誰でもその国の言葉を話すべきで、それも賞賛されるほど流暢に話すことが求められていることに、あなたも私と全く同意見だと思います。日本におりましたとき³、現地の人が私に26歳を過ぎていると日本語上達は不可能に近いと言いました。このお二人の場合、大丈夫でしょうか。この間については、私よりはるかに事情に詳しく、しかも生徒たちをご存知のデントンさんのご判断に委ねます。もしこの二人が現地での伝道活動にふさわしい人材なら、派遣できると思います。[女学校で女性宣教師が]必要だということについては言うまでもありません。

3組か4組の新しい宣教師一家の[日本への]派遣もすぐに必要です。鳥取には家族が1組いる方がいい⁴と初めから感じておりました。そして今、新潟も他の場所と同じく取り残されています。[アメリカの]各地で活動を続けておられる間に、日本にふさわしい精神と能力を持っていそうな神学校を出たばかりの若者と出会うことはありませんか。そういう機会があれば、日本での伝道活動を彼らに働きかけてください。今は、近いうちに派遣する若者の候補者のうち、女性より男性の方が多いです。ですから大学に在籍し、来年卒業予定の若い女性の進路の確認を始められればと思っています。この

問題については、太平洋沿岸よりも東部の方がもっと首尾よく行くだろうと思います。

東部のここ [ボストン] にデントンさんを喜んでお迎えいたします。お手紙をいただくと、どれだけ本当の意味での休養を取っておられるのだろうと首を傾げます。これでは十分な賜暇にはなっていないのではと心配しています。仕事をしながらでは、現場を離れていても大した休暇にはなっていません。オーバンデールへ行くよりもボストンに留まりたいと思われるのなら、ボストンで居心地のよい安価な宿を確保するのは全く問題ありません。ただ全体として、オーバンデールではきっと大いに楽しく過ごされるだろうと思いますよ。楽しい交わりの方ですし、そのホーム⁵で多くの宣教師たちにも出会えますので。来られる数日前にお知らせくだされば、ご要望は出来る限りかなえるようにいたします。

クリスマスと新しい世紀に神の最善のお恵みがありますように。

敬具

ジェームズ L. バートン

1. Miss Very と Miss Heath 詳細不明
2. Daniels, Charles H. (1847-1914) ニューハンプシャー州ライム (Lyme) 生まれ。アマースト大学とユニオン神学校を卒業。アメリカン・ボードで働く前はいくつかの州で牧師を経験。1888年ニューヨーク市のアメリカン・ボード地域主任 (District Secretary) となり、前任の E. K. Alden 引退後はボストン本部の幹事 (Corresponding Secretary) に就任する。
3. 1895年、同志社騒動の始まりのとき、ボード派遣委員の1人として来日した。
4. バートレット夫妻がすでに伝道活動をしていた。
5. 原文では単に the Home としか書いていないが、the Walker Home for Missionary Children であろうと推測される。海外へ派遣された宣教師の子供たちをあずかる施設で元宣教師夫人の Eliza Walker が1870年に設立した。その後、施設は徐々に拡大して建物も増え、預かる子供の数も増える。1906年、Walker 夫人の没後、この施設はアメリカン・ボード運営委員会の援助で更に発展する。1903年に来日して神戸女学院で教えた Charlotte B. DeForest も来日前にこの施設で1年間働いていた。